慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	弁証法研究に関する若干の文献
Sub Title	
Author	奥田, 忠雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1931
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.25, No.11 (1931. 11) ,p.1709(153)- 1724(168)
JaLC DOI	10.14991/001.19311101-0153
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19311101-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のであると做す所以は茲に存する。

同時に他の半面に於て評者は次の如く見る。七十年代に於ける上述の成果は、一言にして云へば「産業資本主義の發達による熟練勞働力に對する需要の增加」を原因とするものである。勿論國民の覺醒や社會連帶の觀念の普及も亦、斯かる成果を生むに資するところあつたことは確かである。乍併尙其れ以上に、教育制度の發達は其の社會の經濟的發達に其の基礎を置くものなのである。然かもロブスンは此の點に就て說くところが殆ど無い。例へばドッブスが一七〇〇年乃至一八五〇年の英國に於ける教育を取扱つた著書の中で、「一部分は科學と發明とが就職に及ぼす影響により、一部分は政治的觀念の生成と闘爭とによつて、産業の發達が新たな知的關心を呼び起した」(Dobds, op. cit. p. 134.) ことを述べてゐるに反して、ロブスンの新著からはこの間の消息を見出し得ないのである。或は、之は當然のこととして言及せず暗默の裡に前提されてゐるのであると善意に解釋すべきものであるかも知れないが、それでは評者は不滿を覺えざるを得ない。從て評者は本書を目して初等教育立法史であるといふのである。たゞ、全篇に亙り引證するところ殆ど原資料のみよりせる點に就ては、僭越乍ら評者は其の勞を稱へ且深謝の意を表さねばならない。從てド・モントマレンシイが其の序文に於て、「著者の目的は從來散逸せる、又場合によつては入手困難な文書にのみ誌された諸事著實を蒐集し以て研究者の便に供ふるに存する」(de Montmorency, op. cit. pp. vii-viii.) と云つたことは、其の儘此のロブスンの新著の全態容に對しても當てることが出來るであらう。

（一九三一・一〇・一二稿）

辯證法研究に關する若干の文献

奥田忠雄

筆者は曾て本誌上に於て（昭和六年八月號「理論經濟學方法論叙說」第二部に於て）、辯證法的思惟形式の根本的特徴として次の二つの點を指摘した。

第一、その思惟形式は單なる主觀的思惟形式たるのみならず、同時に客觀的實在の存在形式と一致し、之を反映するものである。即ち思惟形式の客觀性、現實性、具體性。

第二、その思惟形式は確固不動のものではなく、或る思惟形式はそれ自體に矛盾を含み、その矛盾を次から次へと必然的に克服して、より高い認識段階へと無限に發展する所のものである。即ち矛盾の克服（更に正確には止揚）對立物の統一。（註、此の第二の點は前記論文に於ては未だ充分論究されては居らぬからして、近く右論文の續稿を書く場合に詳しく述べる積りである。）

斯る思惟形式は單なる主觀的思惟形式を取扱ふ所の形式論理學のそれと異なるばかりでなく、又客觀的實在、物自體の世界を不可知なるものとし、專ら主觀に與へられた現象の世界にその認識を限り、此の現象の世界を人々が普遍妥當に認識せんが爲に從ふ可き規範としての先驗的思惟形式を取扱ふ所のカント主義の先驗的論理學のそれとも異なり、正にそれの客觀的實在との一致、現實性と具體性とにその特徴を見出す。而してこの特徴の故にこそ、最近辯證法の研究に對する要求は熱烈であり、哲學界に於ては（ヘーゲル復興を見、社會科學の世界に於ては唯物辯證法の隆盛を見るに

至つたのである。

蓋し人間は先づ所與の客觀的實在を明瞭に認識し、現實性を把握してこそ、正確にその客觀的實在から吾々の要求するものを作り出し又はこれを作り變へることが出來る。夫故社會の轉換期に於て、人々が社會組織の改造に對し多大の關心を持つに至るや、必や社會の現實性を把握せんとする要求が强まつて來る。此のことは明かに歴史的事實が證明して居る。獨乙に於ける哲學の主潮流が曾ては現象の規範認識としてのカント哲學から物自體、客觀的實在の存在認識としてのヘーゲル哲學へと流れた如く、今日に於ても、それは新カント主義からヘーゲル復興への道を辿つて居る。そして今日に於けるこのヘーゲル復興の必然性をヘーゲル主義者 R. Kroner は正當にも斯く規定して居る。『自己の理性に信頼を置く安靜せる市民時代には、ヘーゲル主義的思惟よりも、カント主義的思惟の方が一層よく適合してゐた。曾て獨乙の魂がフランス革命及びそれに續くナポレオン戰爭の出來事によつて甚だしく震撼せられ、その全存在の基礎が危ふくせられるのを見たやうに、今また再び世界戰爭により又それに續く革命によつて、ドイツ人の市民生活の營まれてゐる全地盤が動搖させられた。それ故哲學的討究も、この疑問となつた世界と云ふ存在の、不可解な、この上なく不可解な核心のうちに、再び一層深く突き入つて行くと云ふことは、少しも不思議なことではない。』と。社會科學の世界、殊にその基礎をなす方法論も同樣の運命を辿つて居る。例へば經濟學方法論の如きは、十九世紀末より世界大戰以前迄は、殆んど新カント主義の獨裁下にあつたと云つてもよく、又吾が國に於ても一時左右田イズムの隆盛を見た。然るに大戰以後、殊に最近數年間に於て、是等新カント主義、左右田イズムは一途に凋落の道を辿り、之と反對に單なる現象でなく、現象の背後に隱れた現實の經濟的存在を把握せんとする唯物辯證法の隆盛を見るに至つた。

斯くて、客觀的實在、現實性の把握を可能ならしむる辯證法的思惟形式の研究は、現在多くの人々によつて要求され、必要とされて居るが故に、茲にこれに關する若干の文獻を紹介する。

然し辯證法に關する文獻を紹介するに先立つて、豫め現代に於ける辯證法研究の三つの主要方向に一言するのは無駄ではないと思ふ。何かなれば、これによつて文獻の選擇範圍を限定し得るからである。然らばその三つの主要方向とは何かと云ふに、第一は批判的辯證法、第二は思辯的辯證法、第三は唯物辯證法である。第一の立場は、進んでヘーゲルの辯證法を採用しようとはするが、然しその思辯的に形而上學的なる內容を斥け、專らカント的制限の下に、認識を主觀に與へられた現象世界に限り、これを認識する我々主觀の有限的なる制限されたる精神にのみ矛盾的性質を認めんとするのである。即ち專ら認識論としての辯證法のみを認めんとするのである。この方向は Siegfried Marck がその著 "Die Dialektik in der Philosophie der Gegenwart" に於て明瞭に指摘して居るが如く、現今すべてのカント學徒、即ち西南ドイツ學派から出發した Heinrich Rickert, Jonas Cohn, Bruno Bauch も、或はマールブルグ學派から出た Ernst Cassierer 及び Nicolai Hartmann も或は又ベルリン學派から出た Richard Hönigswald もかゝる批判的辯證法に向つて進まうとしてゐるし、又同樣に Martin Heidegger や Theodor Litt の如き現象學徒もこの傾向から理解される。之に對して、第二の思辯的辯證法は正統のヘーゲル辯證法の流れを汲み、單に我々主觀の有限的なる制限されたる精神に矛盾的性質を認めるに止まらず、更に我々主觀に與へられた經驗的現象の世界を思辯によつて超出し、現象の背後に於ける物自體、客觀的實在の世界にも斯る辯證法的矛盾を認め、斯くて單に認識論としての辯證法に止まらず、同時に存在論、形而上學としての辯證法を主張せんとする。そしてこの客觀的實在を矛盾を通じて自己發展する絕對的精神と見るが故に又觀念辯證法とも名付けられる。この方向を現在辿る者としては、G. Lasson, H. Talkenheim, R. Kroner, H.

Glockner, T. Haering 等がある。第三の唯物辯證法は我々主觀の認識作用に矛盾的性質を認めるのみならず、同時にそれは客觀的實在に內在する矛盾的性質を反映するものであるとし、認識論であると同時に存在論である辯證法を主張する點に於て、正に第一の批判的辯證法とは異り、第二の思辯的辯證法に近附くとは云へ、それは客觀的實在を物質なりとし、神祕的な絕對精神の顯現と見ざる點に於て觀念辯證法ではなく、正に唯物辯證法なのである。此の方向を辿る者は、周知の如く、マルクス主義者達ではあるが、嚴密な意味での唯物辯證法は獨り露西亞に於けるレーニン主義者等の主張する所であり、獨乙に於けるカウツキーを中心とする所謂正統派マルクス主義者は未だ觀念論的殘滓を淸算しては居らず、墺地利に於けるマックス・アドラーを中心とする新カント派社會主義者に至つては、純然たる批判的辯證法を主張して居る。

さて以上の三つの辯證法中、孰れに研究の方向を決定す可きかと云ふに、第一の批判的辯證法は先に指摘した所の吾々の要求する客觀的實在、現實性の把握を可能ならしむる辯證法ではあり得ない。斯る要求に適合するのは第二と第三の辯證法のみではあるが、第二のそれは客觀的實在の本質を經驗的に證明し得ざる神秘的な絕對精神に求むる點に於て、經驗科學の方法論の基礎とはなり得ずして、專ら斯る可能性を有するのは唯物辯證法のみである。と云ふのは、それは一度は思惟活動によつて直接經驗に與へられた現象世界を超出し、現象の背後に存する物自體、客觀的實在の本質を主觀に於て再生產するが、この主觀に於て再生產された本質が眞に客觀的實在の夫と一致するか否かを人間の經驗的實踐活動によつて證明するからである。それ故經驗科學、例へば社會科學の方法論として辯證法を研究する者にとつては、第三の唯物辯證法のみが正しい。

從つて茲に於ては、唯物辯證法の研究に關する文獻を中心として紹介する。先づ第一に豫備知識として、辯證法の古代希臘より現代に至る迄の史的發展に關する文獻を擧ぐ。次いで第二にヘーゲルの辯證法に關する文獻を擧ぐ。と云ふのは、周知の如くマルクス、エンゲルスの唯物辯證法はヘーゲルからの發展であるばかりでなく、更に現在特にヘーゲル辯證法の研究を必要とする理由は、曾てマルクス、エンゲルス自身は唯物辯證法の思惟形式を體系的に明瞭に記述したことはなく、唯、此の方法の適用による所產（史的唯物論、自然辯證法）を殘したのみであり、この果されざる課題をレーニンはその哲學ノートに於て或る程度なし遂げたとは云へ、未だ完成するに至らずして終り、その完成は唯、吾々にのみ殘された課題であり、此の課題の解決はレーニンの暗示するが如く、大體に於てヘーゲルの辯證法的思惟形式の體系（ヘーゲルの論理學）に從ひ、之を唯物論的に解釋し直す點に存するからである。ところで難解なヘーゲル論理學を研究する爲に、先づ最初に（A）ヘーゲル哲學一般の解說書を擧げ、次いで（B）ヘーゲルの辯證法的論理學の解說書を擧げ、最後に（C）ヘーゲル自身の著作を擧ぐ。

第三に直接唯物辯證法に關する文獻を擧ぐ。然し更に之を細別し、（A）マルクス、エンゲルスを中心としての唯物辯證法の解說書、（B）唯物辯證法に關するマルクス、エンゲルス自身の著作、（C）レーニンを中心としての唯物辯證法の解說書、（D）唯物辯證法に關するレーニン自身の著作を擧ぐ。

第一　辯證法の史的發展

Eduard von Hartmann, Über die dialektische Methode. Historisch-kritische Untersuchungen. 1 Aufl. 1868. 2 Aufl. 1910. vgl. bes. s.s. 1-35.（觀念論的形而上學的辯證法論者、古代希臘よりヘーゲルに至る發展を述ぶ）

A. Thalheimer, Einführung in den dialektischen Materialismus. Marxistische Bibliothek. Bd. 14. vgl. bes. s.s. 56-68（高橋一夫譯「辯證法的唯物論入門」希望閣、頁、七一—八九參照、唯物辯證

法論者、殊に第一篇、第五講、古代の論理學及び辯證法參照）

Jonas Cohn, Theorie der Dialektik. 1923. vgl. bes. s.s. 3-51.（批判的辯證法論者、古代希臘より現代迄の發展を述べる）

Thalheimer und Debarin, Spinozas Stellung in der Vorgeschichte der dialektischen Materialismus. Marxistische Bibliothek.（佐藤榮譯「辯證法的唯物論前史」芝生閣）

Deborin, Die Dialektik bei Kant. Studien zur Geschichte der Dialektik. I. In: Marx-Engels Archiv. Bd. I. s.s. 7-81.（邦譯あり、周知の如く唯物辯證法論者）

Deboin, Die Dialektik bei Fichte. Studien zur Geschichte der Dialektik. II. In: Marx-Engels Archiv. Ed. II. s.s. 3-55.（邦譯あり）

Siegfried Marck, Die Dialektik in der Philosophie der Gegenwart. Erster Halbband. 1929. Zweiter Halbband. 1931.（批判的辯證法論者、現代に於ける辯證法研究の諸潮流を概觀し、最後に自己の立場を述べる）

Siegfried Marck, Hegelianismus und Marxismus.（奈良岡茂雄譯「ヘーゲル主義とマルクス主義」岩波）

第二　ヘーゲルの辯證法

A　ヘーゲル哲學一般の解說書

a　觀念辯證法論者、即ち正統派ヘーゲル主義者の解說書

Kuno Fischer, Hegels Leben, Werke und Lehre. Geschichte der neueren Philosophie. Bd. VIII. 1901.（一部の邦譯、坂上絢一郎譯「ヘーゲル哲學解說」白揚社、此の書はクローナーの批評によれば、ヘーゲル哲學に對する理解の殆んど失はれた當時に著はされたものであり、根本的に見て、ヘーゲル精神から全く驚くべき距離を示して居り、また確かに何人をもヘーゲルに導くことが出來なかつたと。蓋し適評である。）

G. Lasson, Beiträge zur Hegelforschung. 1909-1910.

H. Talkenheim, Hegel; in Aster, Grosse Denker, Bd. II. 1911.（大橋勉譯、アスター「大思想家」中、岩波）

R. Kroner, Von Kant bis Hegel. Bd. II. 1924 vgl. bes. s.s. 255-526.

H. Glockner, Hegel. Bd. I. Die Voraussetzungen der Hegelschen Philosophie. 1927; XXI. Band der von ihm herausgegebenen Gesammelten Werke Hegels.

T. Haering, Hegel. Sein Wollen und sein Werk. Bd. I. Eine chronologische Entwicklungsgeschichte der Gedanken und Sprache Hegels. 1928.

b　唯物論者の立場よりする解說書

Ludwig Feuerbach, Zur Kritik der Hegelschen Philosophie. 1839.（恒藤恭譯「我等」九卷、五號、六號）

プレハノフ著、笠信太郎譯「ヘーゲル論」同人社

プレハノフ著、川內唯彥譯「ヘーゲル批判」叢文閣

c　邦語の解說書

紀平正美著「ヘーゲル哲學」哲學講座六、八、九、一〇卷

松原寬著「ヘーゲル哲學物語」同文館、

ヘーゲルの用語法、理想九號「ヘーゲル研究號」頁二一七—二三三頁及び理想社編輯「ヘーゲル復興」頁二七〇—二七九參照

クローチェ著、高見澤榮壽譯「ヘーゲル哲學批判」甲子社

B、**ヘーゲルの辯證法的論理學の解說書**

a　**觀念辯證法的立場よりする解說書**

C. L. Michelet und G. H. Haring, Historisch-kritische Darstellung der dialektischen Methode Hegels. 1888.

W. Purpus, Die Dialektik der sinnlichen Gewissheit bei Hegel, dargestellt in ihrem Zusammenhang mit der Logik und der antiken Dialektik. 1905.

W. Purpus, Die Dialektik der Wahrnehmung bei Hegel. 1908.

W. Purpus, Zur Dialektik des Bewusstseins nach Hegel. Ein Beitrag zur Würdigung der Phänomenologie des Geistes. 1908.

John Mc Taggart Ellis Mc Taggart, Studies in the Hegelian Dialektic. 2 edition 1922.

John Mc Taggart Ellis Mc Taggart, A commentary of Hegel's logic. 1919.

Betty Heimann, System und Methode in Hegels Philosophie. 1927. vgl. bes. ss. 233-410.

Hugo Fischer, Hegels Methode in ihrer ideengeschichtlichen Notwendigkeit. 1927.

b　**唯物辯證法的立場よりする解說書**

レーニン著、川内唯彦譯「ヘーゲル」の論理の科學大綱　叢文閣、（この書はレーニンの三冊の「哲學ノート」と共に、ロシア版「レーニン資料集」第九號に載せられて居る。これはレーニンがヘーゲルの Wissenschaft der Logik を讀んだ際に作つたノートであり、從つてヘーゲルの論理學の體系に準じて唯物辯證法の思惟形式を體系的に研究せんとする者には貴重な文獻ではあるが、惜いことにはヘーゲル論理學の全體系即ち第一篇存在論、第二篇本質論、第三篇概念論の內、僅かに最初の存在論に關する唯物論的解說である。）

レーニン著「哲學ノート」（このノートは九冊からなり、その內三冊はロシア版「レーニン資料集」第九號に載せられて居り、特にヘーゲルの學說に對して如何なる態度をとるかが述べられて居る。他の六冊は「レーニン資料集」第十二號に載せられて居り、最後の方の部分に於て、ヘーゲル論理學に就て書かれた諸著書の批判がある。このノートの獨譯も、邦譯も未だ出てないが、恐らく、近日希望閣から發行される「レーニン選集」中にこれを見得ると思ふ。）

デボーリン著、川内唯彦譯「辯證法――ヘーゲル論理學批判」鐵塔書院（この書はロシア譯「ヘーゲル著作集」の第一卷に揭載された序說の全譯であり、ヘーゲル論理學を唯物論的に研究し直す者に貴重な文獻である。）

イー・ワインシュタイン著、直井武夫譯「ヘーゲル辯證法批判」春陽堂（この書は先に擧げたレーニンの「哲學ノート」を基礎として、ヘーゲルの論理學に唯物論的解說を加へたものであり、特に第四章「レーニンの解釋に於けるヘーゲルの論理學」頁一六〇―三二六を參照せられ度し。）

グ・ドミートリエフ著「ヘーゲルの論理學とマルクス主義の論理學」ソヴェート科學研究會譯編、「マルクス主義の旗の下に」、三卷、四卷

三技博音著「ヘーゲル論理の科學――其把握の爲に」刀江書院（著者は主としてマルクス、エンゲルスの影響の下にヘーゲル論理學の解說を試みて居る。殘念なことに、本書も本質論の後半と概念論に就ては細說して居らぬ。著者は「ヘーゲル及辯證法研究」二三號以後に於てヘーゲル論理學によるマルクス資本論の解釋を試みつゝあることを附記して置く。）

三技博音編「原文對譯ヘーゲル辯證法」人文書房

ヘーゲル研究會「辯證法を解り易く把へる」ヘーゲル及辯證法研究二一號—三〇號、單行本、人文書房

c　**其他の邦語の解說書**

西田幾多郎「私の立場から見たヘーゲル辯證法」國際ヘーゲル聯盟、日本版、百年忌記念「ヘーゲルとヘーゲル主義」中、岩波

小松攝郎「辯證法論理の基礎」哲學雜誌、四八卷、昭和六、七月號、

C、**ヘーゲル自身の著作**

ヘーゲル自身の著作竝にこれに關する英譯、日本譯に就ては理想社編輯「ヘーゲル復興」及び「思想」昭和六年十月號、百年祭記念ヘーゲル研究號、に掲載されたヘーゲル文獻を參照せられ度い。茲では、唯々辯證法的思惟形式を體系的に研究するに必要缺く可らざる次の二著を擧ぐるに止める。

Wissenschaft der Logik.（今日一般に存するものとしては、Glockner 版と Lasson 版とであるが、前者は一八三二—四五年に於て發行された第一回の全集と同一であるに對し、後者は遙かに多くの部分が附加され詳細なものとなつて居るからして、前者よりも寧ろ後者を讀まれんことを勸める。このLasson版は全集とは別に Die Philosophische Bibliothek Bd. 56/57 としても發行されて居る。）

邦譯「大論理學」河野正通譯、第一冊、ヘーゲル著作集第二卷 白揚社（本書は第一篇存在論第一部規定性（質）迄を譯してある。）

Encyclopädie der philosophischen Wissenschaft. Erster Teil. Die Wissenschaft der Logik.（本書は前記の「論理の科學」が大論理學と稱せられるに對し、小論理學と云はれて居る。）

邦譯「ヘーゲル論理學」速水敬二譯、鐵塔書院

第三、唯物辯證法

A、**マルクス、エンゲルスを中心としての唯物辯證法の解說書**

Plechanov, Die Grundprobleme des Marxismus. Marxistische Bibliothek.（恒藤恭譯「マルクス主義の根本問題」岩波、特に頁四三—七〇參照）

Plechanov, Beiträge zur Geschichte des Materialismus. 1896.（板本謙輔譯「近代唯物論史」同人社、特に頁一九一—二二二參照）

デボーリン著、井上滿譯「辯證法的唯物論への入門」白揚社（最近他種の飜譯が出た）

Thalheimer, Einführung in den dialektischen Materialismus. Marxistische Bibliothek Bd. 14.（高橋一夫譯「辯證法的唯物論入門」希望閣）

Karl Korsch, Marxismus und Philosophie.（塚本三吉譯「マルクス主義と哲學」希望閣）

イー・ツインシュタイン著、直井武夫譯「マルクス・レーニンに於ける辯證法」春陽堂

河上肇著「マルクス主義經濟學の基礎理論」改造社版、經濟學全集第八卷、特に頁一〇一—一九三參照

Max Adler, Marxistische Probleme（本書に於て、ヘーゲル竝にマルクスの辯證法を詳細に述ぶと雖も、孰れもこれを批判的辯證法の意味に解釋し、從つて本來認識論であると同時に存在論たるヘーゲル、マルクスの辯證法を誤解す。）

B、**辯證法に關するマルクス、エンゲルス自身の著作**

Marx, Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie.（Aus dem literarischen Nachlass Karl Marx und Friedrich Engels. herausgegeben v. F. Mehring. Bd. I. s.s. 384-398.: Marx-Engels Gesamtausgabe. herausgegeben v. D. Rjazanov. Erste Abteilung. Bd. I. Erster Halbband. s.s. 403-553）

（邦譯、改造社版「マルクス、エンゲルス全集」第一卷、頁二四九—三九五）

Marx, und Engels, Die Heilige Familie oder Kritik der Kritischen Kritik. (Aus dem Literalischen Nachlass. Bd. II. s.s. 65-326)（邦譯、改造社版「マルクス、エンゲルス全集」第一卷、頁四七九—七四六）

Marx und Engels, Deutsche Ideologie. (Marx-Engels Archiv. Bd. I. s.s. 205-306)（邦譯、「全集」第十五卷、頁二八七—四一七）

Marx, Das Kapital.

Engels, Herrn Engen Dührings Umwälzung der Wissenschaft. International Bibliothek. 12 Aufl. 1923. vgl. bes. s.s. 118-145（邦譯「マルクス、エンゲルス全集」第十二卷、頁一九七—五三八、特に頁二八七—三一七、及四九五—五二八）

Engels, Ludwig Feuerbach und der Ausgang der klassischen Philosophie. Marxistische Bibliothek. Bd. 3.（佐野文夫譯「フォイエルバッハ論」岩波文庫、及び「マルクス、エンゲルス全集」第十四卷、頁二八四—二八七、「全集」第十二卷、頁、五八三—六〇三、「全集」第一卷、頁、六四八—六五八、「全集」第七卷ノ三、頁三三三—四一）

Engels, Dialektik und Natur. Marx-Engels Archiv. Bd. II. s.s. 117-395.（邦譯「マルクス、エンゲルス全集」、第十四卷、頁七—三〇三、この書は唯物辯證法の思惟形式に關し、エンゲルス自身によつて書かれたものゝ內、最も包括的なものである。）

（註）既に述べた如く、マルクス、エンゲル自身の著作から直接唯物辯證法の思惟形式に關する體系的叙述を見出すことは困難である。即ち彼等は殆んど全著作に於て此の方法を適用しては居るが、方法そのものをば體系的には叙述しなかつた。右に揭げた諸著書は比較的明瞭にこの方法を叙述したものである。

C、レーニンを中心としての唯物辯證法の解說書

Deborin, Lenin der kämpfende Materialist. 1924（志賀義雄譯「レーニンの戰鬪的唯物論」希望閣）

Deborin, Lenin als revolutionärer Dialektiker. Unter dem Banner des Marxismus. Jahrgang I. Heft Nr. 2. s.s. 201-230.

Deborin, Lenin über Dialektik. U. d. B. d. Marxismus. Jahg. I. Heft. Nr. 2. s.s. 403-411.（河上肇譯「レーニンの辯證法」弘文堂、この飜譯書には右のデボーリンの二論文の外、同雜誌同號所載Lenin, Zur Frage der Dialektik の飜譯も含まれて居る。）

デボーリン著、直井武夫譯「レーニンの唯物論と辯證法」希望閣

I. Luppol, Lenin und die Philosophie. Marxistische Bibliothek. Bd. 15. vgl. bes. s.s. 8-118.（廣島定吉譯、「レーニン主義と哲學」白揚社、特に頁一—二〇四參照、この他にも邦譯あり。）

J. Choronshitzky, Lenins ökonomische Anschauungen. vgl. bes. SS. 9-20.

（註）マルクス、エンゲルス以後に於て、唯物辯證法研究の發展に最大の寄與をなした者はレーニンであり、特に彼が唯物辯證法の思惟形式を體系的に研究せんとして讀破せる多くの哲學書の覺書は、吾々唯物辯證法研究者には最も貴重な指針となる。それ故このレーニンの「哲學ノート」の發表と共に、これを基礎として唯物辯證法の研究は一段の發展を遂げた。今この「哲學ノート」を中心として發表された著書、論文を左に揭ぐ。

イー・ワインシュタイン著、直井武夫譯、「ヘーゲル辯證法批判」春陽堂、特に頁一六〇—三二六。

イー・ワインシュタイン著、直井武夫譯、「マルクス、レーニンに於ける辯證法」春陽堂、

アドラッキー、デムチウク、カーレフ著、「レーニンの哲學的遺產」共生閣、

アドラッキー著、レーニンの「ヘーゲル論理學と辯證法」白揚社版、「マルクス主義の旗の下に」、創刊號、頁二六六—七四、第二號五七—七五、第四號八七—九五、

アドラッキー著、「レーニンの哲學研究に就いて」右と同雜誌、第五號、頁三六—四六、第六號、

四三―五七

デボーリン、「ヘーゲルの論理學の梗概、レーニンが作つたヘーゲルの論理學の梗概のための序言」右と同雜誌、第三號、頁一―八、第五號六七―八〇

フールシチク著、「レーニンの哲學研究ノート」右と同雜誌、第十四號、頁二二―四八、

フィホフスキー著、「レーニンと哲學史の若干の問題」右と同雜誌、第十七號、頁八〇―一一三

D、辯證法に關するレーニン自身の著作

アドラキー編「レーニン史的唯物論體系」希望閣（この書は、レーニン自身が如何なる著書の如何なる部分に於て、唯物辯證法を論究して居るかを調べる爲の索引書として、最も便利な本である。特に頁八七―二七二參照。然し以下に於て、辯證法に關するレーニン自身の著作を大體年代順に擧ぐ。）

第一期　ロシアに於けるブルジア革命の前夜、レーニンの文筆活動の始まり、即ち追放と國外逃亡の時期、

「人民の民とは何ぞや」一八九四年

「ナロドニキ主義の經濟的內容」一八九四年、（此の二書は、彼が早くから哲學的諸問題を研究して居り、且つ完全な唯物辯證法論者として登場して居つたことを證明す。）

ナロドニキや「合法的マルクス主義者」の修正主義に對する論駁書、一八九四―一八九九年

「何をなす可きか」一九〇二年

「一歩前進二歩退歩」一九〇四年、（右の三著に於ては、可成多くの紙面を方法論上の問題に捧げて居る。）

第二期、第一革命の時期と反革命の一時的勝利の時期、

「唯物論と經驗批判論」一九〇八年、（この書に於て、他の如何なる著書よりも、明確に唯物論の意味を把握し得る。）

第三期、一九一四―一九一六年の間、レーニンが最も哲學的問題を多く研究するを得た最終期、勿論それ以後に於ても哲學的問題の研究を放拋しはしない。

「第二インターナショナルの崩壞」（辯證法と詭辯論との差異を指摘す）

「自治に關する討論の結果」

「ユニウス・ブロシューレ」

「戰術に關する書翰」（この三書に於ては、辯證法的思惟の色々の樸機や特性を擧ぐ。）

「再び勞働組合に就て、現實狀勢と同志トロッキー及びブハーリンの誤謬に就て」（辯證法論理の本質に關する通俗的說明を與ふ。）

ブハーリンの著書「轉形期の經濟學」に關する覺書、（唯物辯證法のつかいこなし方を指摘す。）

右の著書の外、唯物辯證法の研究にとつて、最も重要なのは、最近ロシア版「レーニン資料集」第九號に於て發表された「ヘーゲルの論理の科學大綱」と三冊の「哲學ノート」及び、同十二號に發表された六冊の「哲學ノート」とである。

レーニン資料集、第九號

(1)　ヘーゲル論理の科學大綱

(2)　三冊の「哲學ノート」（このノートに於ては、（一）哲學に對しては如何なる態度をとるか、（二）哲學史に對しては如何なる態度をとるか、即ち唯物辯證法の必然性を强調す。（三）ヘーゲルの學說に對しては如何なる態度をとるか、即ち唯物論的ならしめること。等を指摘す。）

レーニン資料集、第十二號

六冊の「哲學ノート」（一）、マルクス、エンゲルスの著書、「神聖家族」に關する大綱、（二）、フォイ

エルバッハの著書「宗教の本質」に關する大綱、(三)ライプニッツに就てのフォイエルバッハの著書に關する大綱、(四)歴史哲學に就てのヘーゲルの講義に關する大綱、(五)哲學史に就てのヘーゲルの講義に關する大綱、(六)エフエソスの闇なるヘラクリトに就てのラッサールの著書に關する大綱、(七)アリストテレスの「形而上學」に對する注意書き、(八)哲學及び自然科學に關する種々なる注意書及抜粋（バウルゼンの「哲學概論」、デボーリンの「辯證法的唯物論」に關する注意書、ヘーゲルの論理學に就て書かれた諸著書の批判はこの内に含まる。）(九)クラウゼウィッツの著書「戰爭及び交戰に就て」に關する抜粋及び注意書）

以上の外、最近のソヴェートロシアに於ける哲學的研究の發展に關する左の論文、討論等を參照することは、唯物辯證法研究の一助となる。特に機械論と唯物辯證法との差異が明瞭となる。

永田廣志譯「マルクス主義哲學の現段階」白揚社
唯物論者協會譯編、「デボーリン派」批判のために、白揚社
「哲學戰線の總決算と新仕務」白揚社版、「マルクス主義の旗の下に」第四號、
デボーリン、「哲學戰線に於ける討論と結語」、同雜誌第八號、
バンメル、「革命十年間における我々の哲學的發展について」同雜誌、第十號、第十一號、
「共産主義アカデミーに於ける哲學論爭の總決算」同雜誌、第十一號、
「哲學戰線の情勢と任務」同雜誌、第十一號
ウ、テイモスコ、「黨と勞働階級とに奉仕する哲學」同雜誌、第十二號、
イ、ポドゥウォロッキ「社會主義建設と哲學戰線」同雜誌、第十二號、
ミーチン「哲學討論の總決算に寄せて」同雜誌、第十五、十六號、
ミーチン「討論の總決算に伴ふ哲學戰線上の當面の活動任務」同雜誌、第十七號、

前號（第二十五卷第十號）目次

◎明治二十年前後の社會問題に關する自由黨左翼の見解　加田哲二
——明治二十年代の社會思想史の一節——
◎「社會政策學會」の成立とシュモラアの社會政策原理　奥井復太郎
——獨逸社會政策思想史續篇——
◎莊内藩の與内制度に就いて　國分剛二

●一冊定價金五拾錢（郵稅金壹錢五厘）
●半ヶ年分金貳圓九拾錢（郵稅共）
●一ヶ年分金五圓四拾錢
●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
●營業に關する用件は發賣元宛
●原稿締切期日は發行の前月十日限
昭和六年十一月二十一日印刷納本
昭和六年十一月一日發行
毎月一回一日發行
三田學會雜誌
禁轉載
第十二卷第一號
第五卷
編輯兼發行者　東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾内　江田範保
印刷者　東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　金子鐵五郎
印刷所　東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　金子活版所
發賣元　東京市芝區三田貳丁目壹番地　丸善株式會社三田出張所　電話高輪一九二六番
●尚ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す
發行所　東京芝區三田慶應義塾内　理財學會